

『朝鮮古蹟図譜』全十五冊において紹介されている。

⑨ 林美雲死去

明治四十五年七月二十九日、本校彫刻科助教林美雲が肋膜炎により死去した。『東京美術学校校友会月報』第十一巻第一号訃音欄に略歴紹介と追悼の記事が、また同第三号に肖像の写真が掲載されている。美雲は文久二年江戸浅草生まれ。旧名西牧正八。高村東雲、光雲に師事し、明治二十四年本校雇となり、同二十八年から三十年まで京都市美術工芸学校に勤務。三十一年本校助教となり光雲のもとで木彫の指導にあたっていた。

⑩ 狩野友信死去

明治四十五年七月十五日、本校創立に尽くし、本校絵画科助教をつとめた狩野友信が中風症により死去した。『東京美術学校校友会月報』第十一巻第一号訃音欄にその経歴紹介と追悼の記事が掲載されている。なお、同誌第十巻第九号によれば、同年六月二日、知己門人二百余名が巣鴨町妙義坂上の丹波（敬三）葉学博士宅で友信の古稀祝賀会を開いたばかりであった。遺骸は染井墓地に葬られたが、大正三年三月一日に至り知己や教え子たちによって狩野家歴代の墓所である池上本門寺に墓碑が建てられた。表面の字は今泉雄作の書により、裏面は正木直彦撰文、屋代晁江書により高仙鶴が刻んだ（『故狩野友信先生墓碑建立報告』大正三年三月）。

⑪ 西郷孤月死去

大正元年八月三十一日、もと本校絵画科助教であった西郷孤月が死去した。『東京美術学校校友会月報』第十一巻第一号訃音欄に略歴の紹介と追悼の記事が掲載されている。孤月は明治三十一年日本美術院創立に加わり、雅邦の娘と結婚（翌年頃離婚）したが、同三十六年頃から放浪生活に入り、大正元年台北滞在中に発病し東京に帰って死去した。四十歳であった。近年、郷里の長野県下を中心に遺作の発掘が進み、展覧会が開かれるなど、再評価の試みがなされ、それらを集約したかたちで昭和五十八年に山川武・菱田春夫編『西郷孤月画集』が信濃毎日新聞社により発行された。

⑫ ラグーン採用の可否

大正元年十一月三十日、文部省大臣官房秘書課長心得瀬戸虎記より正木直彦校長に対してヴィンツェンツォ・ラグーン採用の可否について照会があった。本書第一巻で触れたように、ラグーンは明治九年から同十五年まで工部美術学校彫刻科教師をつとめた後、清原玉らを伴ってイタリアに帰り、パレルモ市に工芸学校を開設して校長となった。同校は間もなく市立高等美術工芸学校に昇格。清原玉は同地で正式に西洋画法を学び、同校の油絵教授となり、画家として名声を得た。明治二十二年にはラグーンと結婚し、エレオノラと改名している。帰国後三十年たち、ラグーン夫妻の日本への想いは止みがたく、大正元年九月二十七日、ラグーンは日伊両外務省を介して日本政府に再雇用を嘆願した。そのために本校に採用の可否が問われたのである。これに対して本校は「経費ノ都合上採用ノ見込無之候」と回答し、本件についてはこれで結着がつかずしてしまっ

た。

「本件に関する文書は「自大正三年至大正三年文部省往復書類」に綴込まれており、そのなかにラグーザの嘆願書の仏訳コピーが含まれている。往復文書の記事によれば、このコピーにはラグーザがパレルモ市の依頼により一八九三年に制作したガリヴァルディ將軍騎馬銅像の写真が添えられていた筈であるが、これは現存しない。この嘆願書の原本は外務省記録中の「伊国人ヴィンセンゾ・ラグーザ氏再採用方請願ノ件」に保存されているらしく、青木茂編『近代の美術46フォンターネージと工部美術学校』（昭和五十三年。至文堂）にその部分訳が掲載されている。

ラグーザは嘆願書のなかで凡そ次のように言っている。私は工部美術学校在職中、明治天皇に謁見し、そのとき伊藤博文を通じて天皇より新宮殿の中央に置く天皇の騎馬像の制作を命ぜられた（木村毅著『ラグーザお玉自叙伝』（昭和五十五年。恒文社）所収マリオ・オリヴェリ著「ヴィンツェンツォ・ラグーザ伝」ではこれを明治十七年とする）。

私はその準備にとりかかり、工房が建てられ、イタリアから材料が運ばれるなどしたが、新宮殿の建物に支障が生じて部分的に取壊しが行われたりしたため、仕事が延期され、また、陛下が宮城建設による国家財政の圧迫を望まなかったことなどにもより、その仕事は中止となった。しかし、陛下が崩御された今、日本国民は大帝国を完成させた偉大な陛下の大騎馬像を首都に建設すべきときを迎えている。私は日本への親愛の情、陛下への敬服献身の気持、および自分のかつての弟子たちをより高度に完成させたいという願いにより、是非とも日本政府に数年間仕え、この大騎馬像を制作したい。

私の技倆を証明するためにガリヴァルディの大騎馬像の写真を二枚添えよう。雇用条件は日本政府にお任せする。かつて弟子たちに約束したように彼らと再会し、東京（正式にはパレルモ）で結婚した妻とともに再び日本を訪れることは喜びに堪えない。妻もラファエルの芸術に関してイタリアの学問を習得し、数多くの展覧会で受賞し、高等美術学校の女子部創設以来十八年以上も指導者をつとめ、自宅のアトリエでは貴族の令嬢を教えているので、日本の公立学校教師としても適任である、と。

ラグーザ夫妻は明治天皇崩御を機として記念銅像建設計画が起ることを予期し、再来日を計画したのであるが、予期に反して大規模な建設計画は起こらず、大正三年に宮内大臣田中光顕伯爵らの発議により立像（原型渡辺長男、鑄造岡崎雪声）が作られ、常盤聖蹟記念館および宮中吹上御所に安置されたのみであった（渡辺正治氏作成「渡辺長男略歴」）。

⑬ 行樹社

大正元年十一月一日より七日まで赤坂溜池三會堂で行樹社同人第一回展覧会が開かれた。行樹社は本校日本画科の生徒や卒業生が中心となって結成した団体で、日本画と洋画の障壁撤廃による絵画の革命を旗印とし、官展反対の立場を表明した。その第一回展はフュンザン会第一回展と同時期で、日本画界の最尖鋭部分として注目を集めた。出品者は小泉勝爾、水島爾保布、小林源太郎、小林波之輔、伊藤順三、五十嵐禎夫、広川松五郎、藤井達吉、浜田葆光、川路柳虹らで、七十余点が出品された（『美術新報』第十二巻第二号。大